

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	濱田 典子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">タスクの認知的複雑さが 学習者の言語形式への焦点化と言語産出に与える影響</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="padding-left: 40px;">主 査 教授 畑佐 由紀子</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 深澤 清治</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 松見 法男</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文では、対話タスクの認知的複雑さが学習者の言語形式への焦点化と言語産出に与える影響について、以下の課題を設定し、検討した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 資源分散変数の認知的複雑さの違いによって、資源集約変数の認知的複雑さが言語形式への焦点化と言語産出に与える影響は異なるのか。</li> <li>2. 認知的複雑さが低いタスクから高いタスクへと配列した場合と、認知的複雑さが高いタスクを繰り返し配列した場合とでは、言語形式への焦点化に与える影響が異なるのか。</li> </ol> <p>本論文は7章で構成される。第1章では、対話タスクを用いたタスク研究における問題の所在と本研究の目的を述べた。第2章では、まず、タスク研究のきっかけとなるインタラクションアプローチに関する言語習得理論を概説した上で、本研究におけるタスクの定義を行った。次に、認知仮説や SSARC モデルといったタスクに関する理論や対話タスクに関する実証研究を概観し、本研究の課題を提出した。</p> <p>第3章では、本研究で用いる言語形式への焦点化の指標を決定するために、意味交渉・訂正フィードバック・Language Related Episodes (LRE) という3つの指標の特徴について検討した。その結果、LRE が最も多くの焦点化を抽出することができることがわかった。ただし、LRE の場合、構造が異なるものも同質のものとして扱ってしまうことから、単純に頻度を比較するだけでなく、LRE の質的な分析を行う必要があることに言及した。</p> <p>第4章では、より効果的なタスクの特徴を探るために、資源分散変数の認知的複雑さが高い条件と低い条件で、資源集約変数の認知的複雑さが学習者の言語形式への焦点化と言語産出の質に与える影響が異なるかどうかを検証する実験1を行った。その結果、言語産出は条件による違いが見られなかった。一方、言語形式への焦点化は、認知仮説の予想と異なり、より言語形式に注意を向けやすい、資源集約変数の認知的複雑さが低いタスクの方が焦点化を引き出すことがわかった。</p> <p>第5章では、1) 単純なタスクから複雑なタスクへと配列した場合と複雑なタスクを連</p>			

続いて配列した場合とで、タスク遂行中の言語形式への焦点化の頻度の推移に違いがあるのか、2) 配列の違いによる焦点化の頻度の影響は、タスク・タイプにかかわらず、同様の傾向が見られるのか否か、という2点を明らかにするために、ジグソータスクと意思決定タスクを用いた実験2を行った。その結果、記述統計の範囲内ではあるが、タスク達成の方略が上手く利用できないために、ジグソータスクではS-C群の3回目で焦点化の頻度が下がること、意思決定タスクでは、C×3群の1回目で焦点化の頻度が低く、3回目になってもS-C群には及ばないことがわかった。

第6章では、実験1と実験2の結果を踏まえ、認知仮説やSSARCモデル、「3つの構成要素からなるタスクの枠組み」に対して、4点の理論的示唆を導出した。第1に、タスクの構成が言語形式に十分注意が向けられる段階が含まれている場合には、認知的複雑さの影響が弱まることを示した。第2に、ターゲット項目がタスク達成に必ず必要な項目であるか、必ずしもタスク達成に必要な項目ではないかによって、学習者の言語形式に対する注意の向けられ方が変わり、それに伴って認知的複雑さの影響も変わる可能性を示した。第3に、TCFで資源集約変数や資源分散変数として分類されている各要素が、常に同じように影響するわけではないという可能性を示した。第4に、同じ構成要素を操作しても、タスク・タイプによってその操作方法の実態は異なり、それによって認知的複雑さの影響度も異なってくる可能性を示した。第7章では、本研究の結果から導出される教育的示唆及び今後の課題を述べた。

本論文では、教示を受けた第二言語習得研究の中でも注目を集めている研究対象であるタスク活動について、以下の2点を明らかにした。

1. タスク効果を測定する異なる指標を比較し、タスク効果研究に最も有用な指標を選定した。
2. タスクの資源集約変数の認知的複雑さが低いタスクの方が焦点化を引き出すという結果から、英語を対象として提唱されている認知仮説の普遍性に疑問を呈し、ターゲット項目の必然性が言語形式への焦点化に影響を与えることを明らかにした。

本研究は、日本語では検討が進んでいないタスクの構成要素の習得効果、タスクの配列効果などについて、組織的に実験を積み重ねた意欲的研究であり、今後のタスク研究における新たな知見をもたらした点で意義深い。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30年 2月 6日